

## 北京五輪大会期間中における競歩種目支援活動報告

法元康二<sup>1)</sup>

1) JOC 専任情報科学スタッフ

### 1. 概要

期間：8月14日(木) 入国 - 8月23日(土) 出国  
滞在先：北京金唐酒店(北京市海淀区塔院志新村2号)

活動内容：

- ① 競歩種目(男女20kmW, 男子50kmW)におけるビデオカメラを用いた判定情報収集
- ② 8月16日(土)開催の男子20kmWにて収集した情報に基づいた女子20kmW, 男子50kmWに向けた情報整理・加工によるチーム戦術支援
- ③ 50kmW出場選手を主とした技術面での専任コーチ支援

### 2. 活動詳細

#### ① ビデオカメラによる情報収集：

日本において通常開催される道路での競技会と異なり、競技会場には多くの観客が詰めかけたことで、審判育成教材などで活用できるような撮影ができるかどうか危ぶまれたが、レース前半-中盤にかけてほぼすべての競技者の画像を撮影することができた。とりわけ、女子20kmWは豪雨の中で実施されたが、小型のカメラをビニール袋でカバーすることで難なく撮影できた。また、五輪期間終了直後に判定種別ごとのムービーを編集してDVDにダビングし、9月1-2日にJISSで行った測定合宿にて五輪代表選手すべてに配布および解説を行った。

#### ② 男子20kmW情報による女子20kmW, 男子50kmW向け戦術支援

男子20kmW終了直後にビデオ画像を判定種別ごとに編集し、各コーチに配布した。また、ベントニーによる失格がいなかったことからロスオブコンタクト判定が鍵になるとしてコメントを加えた。さらに、男子20km競歩で判定を行った国際競歩審判員数名

と面会し、男子20km競歩における日本選手の印象について情報収集した上で、その情報を各コーチに伝達する場を設けた。

#### ③ 50km出場選手に対する専任コーチ支援

滞在期間中のトレーニングは交通量の少ない道路を選んで実施し、選手村南門前の歩道と北郊に位置する国際会議中心の庭園内道路を使用した。それぞれ、トレーニング中のフォームチェックおよび口頭での指導を行った。

### 3. 大会期間中の支援活動における課題および問題点

#### ① 収集情報の競技者支援を目的とした活用に関して

ビデオ情報の収集・映像加工に関しては、もともと日本国内の競歩審判員の育成・研修のために'05年ヘルシンキ世界選手権大会より開始したものである。'05年より'08年までそれぞれの年の世界大会で実施してきており、競歩審判員育成・研修の場で活用されてきている。また、数年前までは国際競技会と比較して国内競技会での判定基準による歩型の許容範囲が非常に大きいという声があったが、ここ数年はその差が縮まってきており、これまでの情報収集活動が反映されてきたといえる。

しかし、競技者支援という観点では、簡便・迅速な情報提供が可能であるという利点はあるにせよ、このような動画資料のみでは競技者・コーチの主観的印象に訴えるにとどまり、課題の指摘に留まるという難点がある。しかし、客観的な分析データによる情報提供は印象に残りにくいという多くの指導者のリクエストを受けてここ数年間は科学委員会活動による情報提供を動画資料の提供という形にシフトし、客観的な分析データでの情報提供は対象を限って行ってきた。

結果として今回大会では男女のべ7名の出場で赤カードを9枚受けることになったが、この枚数を課題の指摘が適切に行われた結果9枚にとどまったと見るか、主観的な印象に訴えかけるような情報提供をメインとしたここ数年の手法の限界が表面化したと見るかは立場によって見解が分かれるところであろう。

## ② 短期支援の限界

今回大会に日本選手は5名出場したが、本大会期間直前の技術指導ができたのは山崎選手のみであり、本大会期間中でも技術指導を行ったのは山崎選手と谷井選手のみであった。また、川崎選手については5月中旬と7月中旬に技術指導を行ったものの、直前期および大会期間中に指導を行う機会はなかった。そのため、本大会に向けた技術指導を行うことができたのは実質山崎選手のみであり、他の選手については過去の判定情報および大会序盤の男子20kmWに基づく判定情報を提供するにとどまり、それ以外は各専任コーチの指導技能のみに依存する側面が多かった。

そのため、競歩種目では技術的側面が重要な要素であるにも関わらず、根本的な課題を抱えている選手に対しては短期的な支援を行ったとしても非常に限定的な成果を挙げるにとどまった。また、山崎、川崎の2選手についても本格的な指導を行ったのはそれぞれ5月、6月以降であり、4月においてみられた歩型上の問題点にいくらかの改善はみられたものの根本的な課題解決には至らず、赤カードを山崎が2種目合計で3枚、川崎が1枚受けるなど限定的な成果しか挙げるができなかった。

今回大会では競歩種目では過去の大会と比較して非常に大きな成果を上げることができたが、日本選手が受けた赤カードは過去大会と比較して非常に多く、薄氷を踏みながらの成果であったといえ、次回大会までの4年サイクルに向けて手法の改善が必要であることを痛感した。